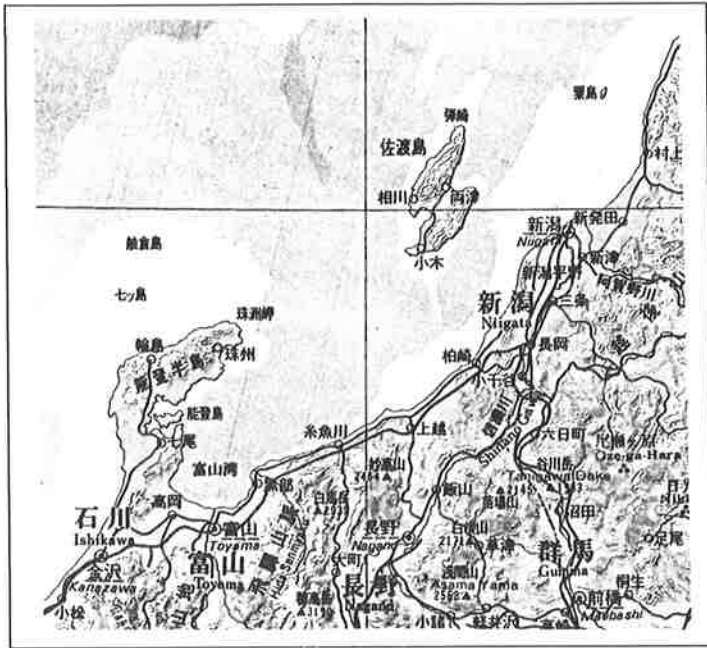


能登と佐渡の間

(平成四年六月二十一日講演)



皆さんご存知のように佐渡と新潟の間は十里あり、佐渡と能登の間は、佐渡おけさにも、佐渡は四十九里波の上…と唄われているように約五十里あります。

古くから佐渡は、近い新潟よりも能登の影響を多く受けてまいりました。

そこで今日は視点を變えて、能登から佐渡をみると、どういふことが見えてくるか、という点についてお話をしてみたいと思います。

一度に沢山のお話はできませんから、古代・中世・近世から少しづつとって、そこから考えられることをお話してみようと思います。

最初に神様のことに触れておきますと、神話では能登にイスルギヒコという神様がいました。「石動」と書いてイスルギあるいはユスルギと読みます。「ヒコ」は男の支配者で、「ヒメ」は女の支配者という意味です。支配者は「神」であり、「守」に通じたり「上」に通じたりしますし、命（ミコト）という意味にもなります。

出雲神話の中心的な神様である大国主命（オオクニヌシノミコト）が、能登半島を攻めたときは、イスルギヒコと争って降参させている。さらに大国主命は糸魚川にまでその勢力を拡げてゆく。糸魚川にヒスイの採れるところがありますが、その神様がクシイナダヒメ。やがて大国主命に征圧されてお妾となるのですが。

大国主命というのは講談社の絵本に出てくる言葉で、本当の名前は穴持（ほらもち）もしくは大己貴（おほひこ）は鉄を作るという意味ですから、八岐（やまた）（又は八俣）の大蛇（おろち）の話はこの人にかかわることでしょう。

では、その頃の佐渡は、大国主命の支配下にあったのだろうか、と考えますと、おそらくその支配権は越後出雲崎までで、佐渡には及んではいなかったのではないかと、思います。

『古事記』『日本書紀』をみますと、新潟県には神様が一人しか登場しません。それは「イヤヒコ」。私どもがいうところの「弥彦（やひこ）」です。これは蔑称でありまして「イヤ」というのは今は「拒否」の意味で

使っておりますけれども、古い時代の字引きでは墓場のことを「イヤ」と表し、「果て、最果て」の意味があります。「日本のはずれ」という意味です。因みに佐渡の地名に「イヤガサワ」があります。佐渡弁でいえば「ヤンサワ」です。

佐渡には佐渡彦は出てまいりません。佐渡に攻め込んできたのはオオヒコ（大彦）の命です。神話では四道將軍―中央政府の遠征將軍と考えられますが、今でいえば「強い將軍」といった意味でしょう。そのオオヒコという神様が、佐渡では一番高い山―金北山に祀られております。

このことは、五世紀（四百年から四百八十年頃まで）の佐渡と能登の違いを大変よく示しているように思われます。

ご存知のように西暦三九一年に神功皇后の朝鮮出兵、三韓（新羅・百濟・高句麗）征伐がありまして、それからの約百年間に日本は大きく変わってまいります。

さきにお話しました大國主命が支配下に治めていた出雲國のような地方集團がいくつか集まって、大和朝廷（といってもそれほどしっかりしたものではないのですが）という統一國家をつくるようになる。

その国内統一に献身した英雄として親しまれているのが、ヤマトタケルのミコトです。ヤマトは「日本」、タケルは「武尊」で、「日本で一番強い男」という意味になります。絵本では一人に例えるので錯覚しますが、固有名詞であると同時に征討將軍を代表する象徴的な人物であると、お考えいただくのが良いかと思えます。ヒミコ（卑弥呼）も同じです。中国の『魏志倭人伝』には西暦二百年代にも三百年代にも登場しますから、一人だとすれば、女王ヒミコは三百年も生きていなければなりません。

さて、そのヤマトタケルが降ったのが雄略天皇です。『古事記』『日本書紀』に伝えられる第二十一代の天皇です。『日本書紀』には非常に悪名高い天皇である―日本だけでなく朝鮮半島にまで出かけて戦争をしているという風に書かれているわけですが、一方では、大和朝廷を統一した人物とみられています。

中国の『宋書倭国伝』という本には、四七八年に雄略天皇が上表文（中国の皇帝に差し上げる文書）を送ったことが書かれていることからみても、五世紀頃の大和朝廷の勢力のほどがうかがえます。

また雄略天皇は古墳を作らせる名人でもありまして、佐渡には、佐渡に攻め込んだ連中が作ったと思われる古墳が西三川や二見半島にたくさん見られます。佐渡では、古墳のことを「エゾ塚」といいます。新潟県で古墳のことを「エゾ塚」と呼ぶのは柏崎から北です。青森県まで同じであります。

「エゾ」（蝦夷）というのは中国の言葉で、自分たちと同じ民族だけど文化のちがう人を指します。例えば漢民族から見ますと、満州人はエゾ。満州は中国人にとってエゾ地です。北海道は、日本内地にとってエゾ。佐渡の者に見ますと、向こうから攻めてきた人がエゾであります。エゾといっても眼の色や髪の毛の色、使う言葉が違うわけではないのです。

記紀には、阿倍比羅夫が東北征伐をしたことは書いてありますが、降参した人や滅ぼされた人のことは出てまいりません。

このことは、大和朝廷からみれば「佐渡はエゾの地である」という風に考えられていたのだろうと思われます。

「越の国」という言葉があります。「越えて行く端っこ」という意味ですが、それが越前・越中・越後に分かれていくことは皆さん、ご存知のとおりです。その頃の新潟県の端はどこであったか、といいますが、柏崎に古志郡というのがあります、そこが北の外れだったのです。では越後の国府はどこにあったか？ 長岡とか三条にあったのではなく、南の外れ、つまり頸城にあった、と考えられる。今の越の国が大体、古志郡のところまでしかなかった、ということの証拠であります。

皆さんは、なぜ佐渡に支配者を祀る古い神社がないのか、お分かりでしょうか。佐渡は大国主命の支配権が及んでいなかったと思われていますから、それ以前の支配者を祀る神社がない。神が大和政権の中に取り入れられれば、支配者の名前が残って祀られるでしょうけれど。

佐渡で神社の位が高くて大きなものは、『日本書紀』に出てまいります「サシバ神社」と「ハナムラ神社」。私どもが全く知らない神社です。「私の部落にある」と答えられる方はいはざであります。因み

に佐渡で一番多いのが熊野神社、次は諏訪神社です。

「サシバ神社」のあった所は相川の高瀬と二見の七浦付近で、「ハナムラ神社」は西三川の小泊です。この地域に大和の人たちがやって来て残した古墳があります。国仲平野に残っているのは、エゾが作ったと見られる土墳（穴を掘って埋める）です。佐渡のお墓の作り方は、土の中を掘って死体を埋める方法で、今アイヌがするような方法だったのです。今でも二見には棺桶を石室へ入れるところがあります。高松塚古墳で見るとようなお墓を持っている家が残っています。

ここは塩田、つまり塩をつくったり焼きものをつくったりする地域でありまして、そこにヤマトタケルの部下といわれるオオヒコが入ってきた。それで金北山にはその將軍をお祀りしてあるわけです。そしてそれまで佐渡にあったものは全部立ち消えになってしまった。本当は立ち消えではないんです。例えば我々の先祖のお墓の作り方などに伝わっておりませけれども、政治の上では出てこない。

そういう風に考えますと、佐渡と能登は近い関係にありながら、能登のほうが政治的に中央政府に近かったということが考えられます。

平安時代になりますと、佐渡と能登の関係が少ししっかりしてまいります。西暦九百年頃のことを書いたものに『今昔物語』という書物があります。三十一巻から成る編者不明の説話集ですが、その二十六巻に次のような話が入っております。要約してみますと、

あるとき、能登のスガネ取り（スガネは砂鉄のこと）がこう言ったそうです。「佐渡の国には金がある」と。それを聞いた国司はそのスガネ取りを呼んで、「どうか、佐渡へ行って金を採ってきてくれんか」と頼んだ。スガネ取りが承諾すると、国司は「何か入用のものはないか？」と訊ねた。「食べもの」と小舟一艘を用意してもらえば、人はいりません」とスガネ取りが答え、その要求通り準備してスガネ取りは佐渡へ向かった。

ひと月ほど経ったある日、国司もすっかりそのことを忘れてしまっていた頃、国司の許へスガネ取りがやって来た。「佐渡へ行って来ました」と言って、ふところからサイデ（布の袋）を取り出した。国司がそっと包みの中の砂金を勘定してみると、千両（一両が四匁）あって、大喜びしたそう。しばらくして国司は、また金が欲しくなり、スガネ取りを呼び出したが、すでに男は行方知らずになっていたという。

この物語に出てくるスガネ取りの家がどこにあったか、を今訪ねてもわかりませんが、だから物語全体がわからない、ということにはならない。今昔物語の時代から能登の国で鉄を作っていたに違いない訳ですから、どこにあったかを考えるのは公式の立て方としてはいいだろうと思います。

能登の地図をご覧いただきたい（本稿末尾添付）。七尾北濱を左へ辿っていきますと海岸沿いに「劔地」という村があります。ここには今でも「金くそ」といって、製鉄をした後の鉾滓（からみ）を沢山見つけることが出来ます。鉄作りの人びとが住んでいた場所であろうと考えられます。劔地という地名の由来もその辺にあるのではないだろうか。さらに調べてみますと、この村では江戸時代までは刀ではなく釣針を作っていたことがわかります。

もう一つは、穴水に近い入江に面したところに「中居」という集落があります。ここは中世には鋳物師の集団があって、その人たちによって鋳造された釜は「能登釜」と呼ばれ有名でした。なかでも宮崎寒雉（一六三三—一七二二）が作った茶釜は「寒雉釜」として名高く、加賀前田家の御用釜師となった人でもあります。子孫も代々寒雉を名乗って当代は十三代目。国立博物館には伝宮崎寒雉作の「大講堂釜」が所蔵されております。

このように鋳物が鋳られたり、釣針が作られたりする奥能登の地域と『今昔物語』の話などから、佐渡に関わる色々のことを類推することが出来ます。そのうち一つ二つをお話したいと思います。

まず、能登で製鉄事業を営む人が佐渡へ行って砂鉄を採っているということは、大変重要なことでありまして、佐渡への製鉄の技術伝播は能登を経由して行われていたのかもしれない、と考えられるからです。例えば能登の人が佐渡へ行って砂鉄を採る場合、事業主が出かけて行って採るのではなく、佐渡の人を雇って日当を支払うのです。

この話が逆に佐渡でどのように伝わっているかを調べてみると、面白い話が出てまいります。

まず、砂鉄を採った場所はどこにあったのか。佐渡の川には安山岩が多いですから、殆どの川から大なり小なり砂鉄が採れる。しかし砂金と砂鉄が一緒に出るところとなりますと、「西三川」川でしょう。金掘りとその辺りで掘らせたのは、ほぼ間違いがありません。この地域の民話を集めた書物の中に、次のような話が記されております。

能登から商人がやって来て、根深（ねぎ）を買った。その根深に砂が付いていたので、彼は翌日も来て根深を求めた。それでとうとう畑の根深を土ごと分けてやったそうです。そうこうしているうちに商人が欲しかったのは、根深ではなく根深に付いている砂だと気がついて、百姓は売のを止めた。それから自分たちで砂鉄を採るようになったという。

佐渡に砂鉄を精錬した跡は沢山あり、「穴釜」という地名が残っている。穴釜というのは、佐渡の呼称ではないんです。愛知県から岐阜県にかけて、斜面を使ってセトモノを並べて焼く施設を、現在は「登釜」といいますが、中世、鎌倉時代までは「穴釜」といったのです。その影響もあって、佐渡にも「穴釜」と呼ばれる場所が少なくありません。たとえば両津市立野に「穴釜」という地字があります。今はダムになっておりますけれども、土地の人に訊きますと、曾てはそこに金くそがあったのを見たことがあるという。いったい穴釜で作られていた鉄は、何に使われたのだろうか。それは製塩用の釜であります。釜は鋳物で作られるのですが、そう簡単に出来るものではなく、技術を持った人を招いて指導を受けたことが考えられます。

小木町の「堂釜」という集落へ行きますと、「金子」の名字が何軒かある。「金子」は本来、鍛冶の仕



事に携わった人たちにつける名字だったので。

その堂釜に住む鈴木さんは、佐渡の出身ではありませんが、佐渡の昔話を調べておられる。調べによりますと、「堂釜の人たちの先祖は、能登守教経のりねの子孫で順徳上皇に随行して佐渡へやって来た」という言い伝えがある。能登から来たことを自慢する風潮があるのだともいう。

能登と佐渡を考える場合には近いか、海流に乗ってくれば一息だから人の行き来があったという風に距離で考えるのは誤りでありまして、必要があれば朝鮮にだって出掛けて行きました。技術の伝播（文化の伝播も同じ）には人の移住がなくてはならないということです。とりわけ技術については人の腕を通して学ぶのでなければ、本格的にモノを学ぶことは不可能であります。

佐渡から能登へ行った人よりも、能登から佐渡へ来た人のほうが多かったのだろうと思われまふ。人が移住したことで先ず考えられるのが「地名の類似」です。能登半島には佐渡と同じ地名が大変多い。三崎、内浦、田の浦、真浦、折戸、小泊、二見、細屋、長手崎、三島、新保、小木、小浦、木ノ浦、長浜…。

地名が似ているからといって例えば、能登の腰細こしほの人が佐渡の腰細へ来て住んだか、となると、そうではないだろうと思います。人は似たような場所には似たような地名をつける、それだけのこともあるかもしれません。奥能登には同じ地名が驚くほどありますが、口能登（半島の付根の地域）にはそれ程でもありません。

この辺で中世のお話を一つしておきます。

珠洲郡すずに内浦町という所があります。曾て京都には貴族・九条家がおりましたが、内浦町はその九条家若山荘わかやまのじょう（平安時代末期につくられ、後に九条家に寄進された荘園）です。その領家職が日野（大納言）氏であります。

珠洲郡は、今申しました内浦町と珠洲市に分かれており、珠洲市には若山荘の港、飯田がある。そこに残されている言い伝えから、能登の人たちが佐渡をどのように見ているか、ということをお話してみたい

と思います。

能登鉄道飯田駅から二つ目が鵜飼駅。ここから四十分ほど歩きますと、真言宗の古刹、法住寺があります。このお寺は、さきほどお話ししました若山荘の領家、日野氏の祈願寺でもあったのですが、こういう話が伝わっております。史実の上では正しくありませんので、物語として聞いていただきたい。

昔、弘法大師がここから佐渡の小木町にある蓮華峰寺へ行ったという。蓮華峰寺は今も真言宗ですが、



島附見

言い伝えの中では天台宗ということになっており、この点からも弘法大師が天台宗のお寺に赴くというのはつじつまの合わない話ですけれども。ともかく蓮華峰寺へ行って再び法住寺へ戻ったのですが、途中、鵜飼海岸から三百メートルほどのところにある小さな島を見つけた。この由来から見附島と呼ぶようになったという。島の形が軍艦に似ているため、土地では軍艦島ともいわれている。この島には見附神社がありまして、お祭りの日には必ず佐渡の方角から風が吹くという言い伝えがある。この神社の神様を盗んで佐渡へ連れて帰ったために、その御神体は佐渡の領主が持つており、お祭りの当日は、神様が見附神社に帰りたがるので佐渡から見附島の方角に風が吹くと伝えられている。

一体、法住寺という所がどんな場所だったか、を調べてみましたら面白いことがわかってまいりました。このお寺の寺領は、一帯の山や谷は勿論のこと海岸までありまして、沢山の古墳群が見つかっております。曾てはその海岸に塩田があって、塩を焼いていたことがわかります。

そこに八百比久尼の話がある。八百歳まで生きた婆さんが故郷に帰って見たら知ってる人が一人もいなかった、というおなじみの玉手箱の話であります。

この話は佐渡の羽茂(大石)にも残っている。味噌工場の近くにバス停「エゾ塚」がありますが、この辺りに八百比久尼が住んでおったとか。また、越後の弥彦の近くの海岸、野積も大きな塩田地帯でありまして、八百比久尼の話があります。

いずれも曾ては塩田地帯で、婆さんの名前は米さん。相川に米郷という部落がありますが、やはり塩田の中心地でした。ヨネ（米）というのは大和の米づくりと関係があるのだろうと思います。米づくりと塩づくりは大和の特技だったことがうかがえます。

小木の堂釜の辺りに「夏居」という地字があります。ここに住む人たちは夏の間は塩を焼き、冬になると羽茂の町の近くにある部落「冬居」に帰って行ったという。面白いことに「夏居」と「冬居」を結ぶ道路のちょうど中間点に位置するのが、小比叡山蓮華峰寺であります。

このような話をしてまいりますと、佐渡と能登の関係は鉄の技術伝播とともに塩焼きの技術伝播もなされたのではないかと、ということが少しづつ見えてくるのです。

余談になりますが、皆さんは次のような言い慣わしがあるのをご存知でしょうか。

能登の法住寺では、七月十七日に西の市が開かれる。この日は「悪い鳥は佐渡へ飛んで行け」と念じるのだそうです。弥彦の近くの野積では「悪い鳥は羽茂へ飛んで行け」と。もっとも佐渡には、こんな言葉がある。「暮らせんようになったら、江差へ行け」。「能登へ行け」とは絶対言わない。

概して越後の人間は東京へ行きますと、さほどでもないが、北の方へ行きますとデッカクなるらしい。事実、江差の大きな回船問屋「関川家」は、越後の関川の出身者である。逆に佐渡から能登へ行った成功者もいる。福浦という港がありますが、そこで一番大きな回船問屋といえば「佐渡屋」。赤泊出身の本間さんの才覚が実を結んだものです。

では能登で成功した人はどこへ行くか、といえますと金沢ではなく、新潟なのです。何となく人は北の方に憧れるのかもしれない。

さて、能登から移住して来た人たちが、いったい私たちにどの程度の文化的影響を与えたのか、ということを少し申し上げておきたいと思えます。

それは次のような発想に基づくものであります。

日本人は、江戸時代の初めにポルトガルやオランダなどから技術的・文化的な影響を受けた。接触していた期間を考えればオランダは約二百年、ポルトガルは約三十年ですが、短かったポルトガルの影響をより強く受けており、私どもが日常使う言葉の中にその幾つかが見られます。例えばパン、テンプラ、シャボン、コンペイトウ、ブランコ、チョッキ、ザボン、ビロード、カステラ、チャルメラ、フラスコ、テレピン油、ギヤマン……。これらは全てポルトガル人からもたらされた外来語です。

同じように能登から佐渡へ伝わった言葉で、佐渡と共通するものを挙げてみます。能登弁をカタカナで書きますが、在京の皆さんには、どれだけおわかりでしょうか。

○クズヤ（クズ屋根のこと。萱なで葺いたもので、紙クズ屋のことではありません）

○ミミ（茸のことで能登と佐渡だけの呼び名です。「山へミミ採りに行く」などといひましよう）

○ナンド（納戸のこと。寝室に使った部屋で、銭箱が置いてある。一家の経済力が納まっている所）

○セセナゲ（流しの下の溝のこと）

○ヨナデ（佐渡では「ヨナレ」、ダ行とラ行があべこべになりますから。本来は夜のさざえ採りのこと）

○ツレニヨーボ（嫁入りの時、花嫁を迎えに行つて挨拶をし、花嫁に付き添ってくる女性のこと）

○カタネボウ（塩汲みの時に使う天秤棒のこと。安寿と厨子王の話に出てきます）

○カーカー（母親のこと。カカは女房のこと）

○ヒトカタケ（一食のこと。「ヒトカタケご馳走になる」とかいいます）

○ヒトタテ（使者の回数のこと。「ヒトタテたてる」とか「フタタテたてる」などという）

○イッパイ（イカを数える時に使う。イカ、イッパイ：佐渡では「イッペイ」ともいいますが、イカ一

匹のことで沢山のイカではない）

○ヒトハカ（田圃の人足が、カベタを打つ時の一列のこと。「ヒトハカずつ耕す」とか、田植えの時、「五ツハカ持つて進む」などといひます）

- ボウ（牛のこと。「ボウボウ」と牛を呼んだりします）
- ハシャグ（乾くこと。騒ぐことではない）
- ヨバレル（招待されること。「フルメーにヨバレル」といえば振舞いに招かれることです）
- ゲラツク（ゲラゲラ笑うこと。よく先生に「ゲラツクな」と叱られたものです）
- ネグサイ（腐敗のこと。「棚に入れてネグソウなった」などという）
- ソーレン（葬式のこと）
- ヤキバ（火葬場のこと）
- アグチ（胡座あぐらのこと。「アグチをかく」という）
- ヤメル（痛むこと）
- ネマル（坐ること）
- コスイ（咬いこと）
- オメ（おまえのこと）

他にもまだまだありますが、これくらいにします。

このように能登の言葉が何故佐渡に多く残るのか、そして越後の言葉はどうして佐渡へ伝わらないのか、といった疑問点や、文化の伝播には距離で解決できないさまざまな問題が含まれていることについては、今日お話申し上げたとおりであります。

〈了〉

